大きいアジアの役割

第1回漢字文化フォーラム　儒教ルネッサンスを考える（下）

パネルディスカッション第2日

『漢字文化圏の経済発展と世界』

報告

基調講演

近代化との関係

外来文化の吸収

日本の発展はむしろ欧米型

共同体尊重し行動する日本

労使の紛争も平等主義解決

儒教経済圏に〝権威主義〟も

東アジアに主導力

金日坤（キム・イルゴン）釜山大教授　世界の経済秩序が再編成期を迎えている中で、経済発展の主導力は儒教文化圏である東アジアの国々にあるのではないかと考えている。経済の発展は経済理論だけでは説明できず、文化面からも論じなければならない。

キリスト教文化圏の個人主義文化は、精神文化（道徳性）を軽視し、規律なき競争の中で、人間関係の荒廃、快楽のみの追求により限界にきている。東アジアがこの失敗をまねしないとは限らない。個人主義文化の長所を取り入れながら、内面に伝統の集団主義の倫理と秩序を生かしていくことが、儒教文化圏の行くべき道であろう。

外圧への共通目標を

鈴木幸夫横浜国大教授　ジャパン・バッシングの根底にある異質ルールの日本型システムへの批判に、どう対応するかという問題が一つある。またアジアの国々はそれぞれ異質な部分を持っている。EC（欧州共同体）統合など大きく動いている方向にのみ目を向けるのではなく、共通面、異質面を認め合うことが必要だ。

日本人個人は流動的、競争的な人種だが、日本の政治・経済のシステムは、共同体重視が根底にあり、そこに思想的な伝統があるのは否定できない。ルール変更のためコンセンサス（合意）を形成していくためには、外圧に対する共通目標を持つという行き方しかないのではないか。

ASEANにも及ぶ

飯田経夫国際日本文化研究センター教授　近代化と儒教の関係を論ずることは難しい。経済発展は儒教文化、漢字文化圏のみならずタイ、マレーシア、インドネシアなどASEAN（東南アジア諸国連合）まで及んできている。それをどう考えるか。

日本の構造問題は、解決していく必要があるにしても、日本の経済発展を考える時、エコノミック・アニマルであるという点で、むしろ、ある時期のイギリス、アメリカと似ているのではないか。

渋沢の独特の読み

長（ちょう）幸男東京外語大名誉教授　近代日本資本主義の指導者である渋沢栄一が、儒教をどのように考えたか。急ピッチで資本主義的経済成長を遂げている日本や、東アジアNIES（新興工業国・地域）は今、政治・経済・文化の方向を模索している。

マックス・ウェーバーは近代資本主義において、儒教をネガティブなものとしてとらえた。しかし十九世紀末、渋沢は儒教によって近代資本主義を推進しようとした。儒教を自由な解釈のできるものとし、時と場所と目的で儒教を読み論語を適用した。ウェーバーが考えた資本主義の資質を転換したことに渋沢の独特の読みがある。

―― 飯田

―― 鈴木

―― 金

―― 中島

中島　本日は政治経済という側面からいろいろアプローチしていただく。既に金日坤先生からは儒教文化圏という問題を経済学の立場から、長幸男先生からは日本の資本主義の勃興期の実業家であり、儒教解釈でも非常にユニークな思想家とも言っていい渋沢栄一を軸に問題を提起していただいた。この二人の先生方の講演とも関連する意味で、飯田先生と鈴木先生にも問題を提起していただく。

飯田　ごく最近まで、産業革命を経て先進国になった国というのは、ヨーロッパの北西部のプロテスタンティズムの文化圏の国々およびその出先の国々、北アメリカとオセアニア、プラス日本だった。それ故に最近のアジアNIES諸国の台頭は、恐らく世界史的意義があるほどの重要なことで、そこにはヨーロッパ北西部のプロテスタンティズムに対応する（東アジアの）儒教がある。ところが、儒教についていろいろ勉強し、議論をしていくと、どんな議論でもできるという感じがする。つまり、儒教は近代化にプラスであるという議論もでき、マイナスであるという議論もできる。これは大変な問題だと思う。しかし、最近ASEANの発展を見ると、これは漢字文化圏の議論としては非常に難しい問題になる。絡みの面で少し整理してみたい。

次に日本の経済発展は、例えば、アメリカやイギリスの経済発展とは違ってはいないのではないかという点だ。日本経済や日本人の行動様式に対する批判は反省するとして、翻って考えると、今の日本人と、例えば二十世紀前半のアメリカ人、十八世紀後半から十九世紀前半にかけてのイギリス人とそっくりだった面が幾つかあるのではないかと思う。そうすると、文化というのは確かにあるだろうけれども、そうではなくて、いったん非常に勢いがついた経済もいずれ駄目になるだろうというパターンがあるのではないか、日本はもうすぐ駄目になるだろうという予感である。これではなかなか文化論にはならないが、今の日本の問題を考えるときに、そういう議論というのは大いに意味があるのではないかと思う。

鈴木　日本の政治経済のシステムの特徴と儒教との関連について。

日本の政治経済のシステム全体の一つの特徴というのは、ともかく何か事が起こるとみんなで総掛かりで取り組むというところがある。これは一つは、日本の社会というのは、実はインサイダーではあるけれども、その中のそれぞれの個人がまた別な組織、それぞれ別なグループにみんな属している複層化したインサイダー社会だというふうに私は定義している。外とのつながりも、いきなり多面的に広がるとか、ネットワークづくりも多層的に結ばれるのでなく、幾つかのステップを踏みながら多層的に形成していくというのが日本人の行き方だ。ある程度自己抑制を働かせるのは、そういうグループなり組織なりに入り込んでいた方が有利であるからそうなっているだけの話で、基本的には個人はリベラルで自由だし、非常に流動性が高い。競争的でもある。それが共同体優先型の行き方や、アメリカと違ったマーケットの作り方をやっている根底に、やはり古くからの思想的な方をとっていくという面がある。

もう一つは、日本の社会というのは、実はインサイダーではあるけれども、その中のそれぞれの個人がまた別な組織、それぞれ別なグループにみんな属している複層化したインサイダー社会だというふうに私は定義している。外とのつながりも、いきなり多面的に広がるとか、ネットワークづくりも多層的に結ばれるのでなく、幾つかのステップを踏みながら多層的に形成していくというのが日本人の行き方だ。ある程度自己抑制を働かせるのは、そういうグループなり組織なりに入り込んでいた方が有利であるからそうなっているだけの話で、基本的には個人はリベラルで自由だし、非常に流動性が高い。競争的でもある。それが共同体優先型の行き方や、アメリカと違ったマーケットの作り方をやっている根底に、やはり古くからの思想的な伝統というものが、単に儒教的な共同体思想なのか、その部分が何なのかというところは私自身もまだ十分に整理できていないが、日本人はかなり実利志向型で現実主義だから、要するに哲学だけでは絶対動かない。しかし、宗教性は全くないかというとそうではなく、基本は祖霊信仰といいますか、やはり儒教からきているんだろうと思う。

金　日本の経済発展と欧米のそれとはあまり違わないのではないか。どこの国でも発展の段階はあると思う。時間に例えれば、今、韓国は十一時半で、正午にまだ時間がある。日本はそろそろ一時になっている。アメリカは三時か四時、ヨーロッパは大体五時じゃないかと思うが、その段階が早く来ないようにいろいろな構想をすべきです。それがすなわち儒教倫理のルネッサンスになるわけです。

また、飯田先生は東アジアの特徴を話しながら、ケインズ以降の福祉国家が現れて、失業と餓死に関する恐怖がなくなり、脅しがきかなくなって徹底的な平等主義が起きたということと、これは私も賛成だ。この平等主義こそ儒教の家族倫理でもたらされたものであるというのが私の立場です。例えば日本の場合は、大体高卒者が会社に入ります と、その月給の七・五倍が社長の月給です。韓国で一番の高給取りがサンスイ・グループの会長さんで七百万ウォンで、韓国も十倍は超さないのです。アメリカは九十倍です。しかもアメリカの最高俸者はウォルト・ディズニーの会長で、年俸四千万ドル、月二十億ウォンになるわけです。もしも日本とか韓国の大きな企業で社長とか会長が月二十億ウォン取れば、これは大きな問題になり得ると思う。だから九十倍と十倍以内とは、だれかがさせたのじゃなくて、自然にそうなったということです。これが文化の違いということです。

韓国では八七年度から労使紛争がものすごく起きて、日本が昔たどった道を行っている。結局、平等主義に行かなければ労使紛争は収まらないのです。だからお金を持っている人、学んだ人が譲歩するということ、道はこの二つしかない。

【以下、パネル討論】

―韓国の労働組合の指導レベルにおける企業への集団的ロイヤリティーというような問題が、日本と同じと考えていいのかどうか。

金　一九八七年度にいわゆる自由民主化の波が始まり、八七年度の八月に一カ月に三千件の労働紛争が起きた。これは爆発的な現象で、これも儒教文化圏の一つの特徴だと思う。一つの空気というか体制、あるところでやればうちもやろうということになる可能性、これは個人主義の国ではあまりない現象です。賃上げやボーナス要求は、世界中どこの労働紛争でもあるが、長期勤続者を優遇しろ、家族手当、子供の学費を出せなどの要求事項が労使紛争の時に出るのは、儒教的な特徴であり、文化を表していると思う。

次に、企業に対するロイヤリティーはどうなったかというと、労使紛争が起きると、結局月給を上げざるを得なくなる。このときに面白いのは、財閥、グループによって、労使紛争が激しく起こる財閥もあるし、全然起こらないところもある。これが企業文化の違いなんです。もう一つは、儒教の悪い面である権威主義的な部分を見直して人間尊重、家族主義の方向に向かっている点だ。最近は労使紛争も減りつつあり、現に今年は大きな紛争はほとんどなかった。

―儒教思想を強調するあまり国家資本主義体制に流れる恐れはないのでしょうか。

中島　国家資本主義体制というか儒教経済圏の発展のプロセスを見ていると、日本の場合は違うと思うが、いわゆるアジアNIESの場合に、一種の開発独裁型の国家資本主義体制、いってみれば権威主義体制をとってきたような気がする。その観点でこの問題を見たらいかがでしょうか。

―「由（よ）らしむべし、知らしむべからず」という論語の言葉がある。つまり民衆にすべて民主的であることが逆に一つの混乱をもたらすのではないか。あるいは民主主義の中に逆にファシズムがあるのではないか。民主主義の中に存在する悪質な部分を使用する意味での儒教というものが考えられないだろうか。

中島　ヨーロッパ中心主義の後に来るのは東洋道徳だというような議論がよくある。しかし道徳というのは必ずしも東洋だけではなく、すべてに共通する問題であって、東洋特殊論に逆戻りしていく可能性があるので、これは避けなければならない。

―儒教が外来文化を吸収することに優れていたという指摘があったが、いわゆる中華思想と孔　歴史的経過から見ると、儒学の外から来た思想に対する同化力は非常に強かったが、そのころの世界に対する認識は、中国の周囲にあるわずかな小さい国にしか及んでいなかった。そこで統治階層の人々は、容易に中国を中心と考えるようになったのです。しかし、近代になり、ヨーロッパでは非常に早い速度で資本主義化を成功させたため、中国は相対的に遅れた国になり、中国を中心とする思想は基本的にはそこでもう打破されてしまったわけである。

中国と日本を比べてみても、日本の方が近代に入ってからの進歩は目覚ましく、中国の近代の民主主義の思想家たちの多くは日本に留学して学んだ人たちだ。現在では中国を中心として考える中華思想はもう成立し得ない状況になっている。

現在、中国の政府は対外開放政策を進めていて、国外のさまざまなものを学ぶことが基本的に必要なのだが、中国は非常に歴史も長く、さまざまな文化的遺産を持っているので、海外から学ぶといってもすべてを導入するのではなく、少しずつ選択して入れるということになるわけである。儒学は他の要素を吸収するのに非常にすぐれていたと言ったが、これはまさに中華を中心とするというのとはちょっとずれる部分なのです。

中島　儒教文化圏ないし漢字文化圏を絶対化してはならないし、また、文化の問題を論議するには慎重さが必要である、という確認のうえで、経済発展の背景にある儒教の持っている個別的な価値をどう受けとめるかということと、経済発展という問題をどういうふうに考えるのかということがわれわれの議論の大きなポイントになってくると思う。

何とはなしに儒教がしみ出しているような社会風俗というか歴史的背景というものを経済学は取り入れなくていいのかということと、経済学におけるグランドセオリーの崩壊という問題に対するお答えをいただいて、このセッションをしめくくりたいと思う。

飯田　今、東アジア、東南アジアで産業革命の成功例が相次いでいるが、楽観的に想定すると、二十一世紀はアジアが世界の有力な勢力になるだろうと思う。一定の時間がたてば、必ず全世界がアジアに注目して、西欧中心思考は少しずつ変わっていくということがこれから起こるのだろう。

だから私は文化は考えなければいけないということに対しては全く異論はないが、あまり文化、文化というふうにすぐに文化に説明を求めるのは若干どうかなと思う。これは経済学者としてのこだわりかもしれない。

鈴木　日本でも韓国でも中国でも、あらゆる国の経済システムは、似たところも違うところもあり、同じところは一つもない。ECもそれぞれ違う中でどこまで共通点を見いだし、統合市場をつくっていくかだ。民族のアイデンティティーとか、文化とか、経済の特殊性というものはすべての国にあるわけで、その強調の仕方に問題があるのではないか、という感じがする。

要するに、異質性と言われているものを、どこが異質性か異質性じゃないかということをもうちょっと振り分けることと、異質な部分でもいいものは堂々と開き直っていいと言えばいいし、悪いものは改めればいい。ただ、その物差しが、まだ国際的に編み出されていないので、経済大国になった日本はアメリカやヨーロッパとともに正しい物差しを積極的に議論していく必要があるのではないか。

伝統というものがあるということは否定できない。その共同体尊重の思想というものも、単に儒教的な共同体思想なのか、その部分が何なのかというところは私自身もまだ十分に整理できていないが、日本人はかなり実利志向型で現実主義だから、要するに哲学だけでは絶対動かない。しかし、宗教性は全くないかというとそうではなく、基本は祖霊信仰といいますか、やはり儒教からきているんだろうと思う。